

椿説弓張月

残篇

六

~13  
3008  
30



13  
3908  
30

遠  
南  
一  
舞  
天  
樹



書  
命  
禮  
節  
大  
正  
五  
年

林生天満宮を再興とす。亦つる壽星老上蓬萊も舊樂亡びと。中葉より明樂と撮合し。その名を今存とるこそ大約此國の浮屠の法。只禪と密との三教あり。上代め水葬のころのしを舜天王のとき。水葬を林示りて土葬とし。多く日本の古実本づじ。只平民も火葬とるころ。又聽し。又。さる。後。文治四年の春熊野の神を祀らんとて。未吉小宮社の手斧とし。め。折草木。一夕。槁鴉あま。死。多。平。の。朝野眉根を頻り。この年日本。源頼朝卿鎮西。衣河の館小滅亡。海内。毎異。属。源頼朝卿鎮西。下知を傳へて貴賀井を移降せ。奇賀井。即奇界。前所云琉球の惣名。緯の濫觴を。今。春。之。月。の。比。鎮西の武士宇都宮所衆信房が琉球の地圖を進。天野

頼朝御 遠景ホ 貴賀井を 村。 巻ノハの 身四葉 等。 本式ハ別 小抄詠 一者ヨヨ王

藤内遠景并所衆信房ホを大將として野の軍兵を起。彼諸嶋を。頼朝一切聽。遠景信房ホ。太平山。攻。中山へ。舜天王ハ。松壽紀。平治鶴龜ホを召集。今や頼朝武運高く。虎貴三千。百万騎。將。故。兵を南鄙の藩。屏小加んと。寡。固。衆小敵。頼朝ハ舜天。為朝の子。鎌倉主。後。頼朝ハ舜天。為朝の子。同宗の好を破。速小和睦。請。塗炭を救。駿。鏡。衆皆仁。我。感服。藤。林。大夫。和。遠景信房。慎。禮。儀。感佩。竟小軍兵。

諸神の擁護（おんがく）ふよるとして舜天王（しんてんおう）の殊（こと）の社（やしろ）を建てしむる  
小遠景等（ことんげんら）が軍兵（いくさ）をくしむる。次の日（ひ）故（ゆかり）なく枯（か）る草（くさ）も木（き）も俄（たちまち）頃（ころ）に花（はな）  
開（ひらく）れて鴉（からす）の死（し）よりけるはとりあり。一（ひと）叢（むら）の菊（きく）生（な）出（い）たり。秋（あき）小（こ）至（いた）てそのむ  
をえるふ多（おほ）香（か）寔（じ）凡（おほ）常（じょう）にのび。これも亦（また）後の栄（さか）を志（こころ）しむるふ之（この）熊（くま）  
野（の）の神（かみ）の示（し）現（げん）るふめとてやぐてその菊（きく）と八咫（やぶ）鴉（からす）とを名（な）つらふふこの苗（えい）  
世（よ）ふ（つ）傳（つた）へや四（し）知（ち）堂（どう）詩（し）稿（こう）。八咫（やぶ）鴉（からす）を咏（えい）むる詩（し）あり。録（ろく）して證（あやま）とら。  
紫（むらさ）袍（へん）金（きん）帯（たい）已（い）堪（た）誇（たか） （此菊偏名八咫鴉）  
不（ふ）向（むか）斜（しや）陽（やう）深（しん）處（ち）噪（さう） （也教載酒訪陶家）

琉球（りゅうきゅう）の楊（やう）文（ぶん）鳳（ほう）が化（け）なり。かくて中山（ちゅうざん）を異（あ）ふ（ふ）属（ぞく）して舜天王（しんてんおう）の德（とく）二十（にじゅう）六（ろく）  
嶋（しま）淳（じゆん）化（け）。民間（みんげん）も母（はは）字（じ）を習（なら）ひて日用（にちよう）の書記（しき）も便利（べんり）あり。國（くに）に学校（がくこう）  
を置（お）く。和漢（わかん）の文章（ぶんじやう）も手（て）から紀（き）平（へい）治（ち）ハ百（ひやく）歳（さい）の上（の）壽（じゆう）を承（う）けら松（しょう）壽（じゆう）も

又（また）八十餘（やそじゆ）歳（さい）ふ至（いた）り。この兩（りゅう）大（たい）臣（しん）没（ぼつ）して後（のち）鶴（つる）龜（かめ）同（どう）胞（ぱう）と松（しょう）壽（じゆう）父子（ふし）高（かう）滿（まん）と  
國（くに）の政（せい）をより行（な）ひたり。舜天王（しんてんおう）在（あ）在（い）位（い）五（ご）十（じゅう）年（ねん）。傳（でん）信（しん）錄（ろく）小（せう）五（ご）十（じゅう）  
卒（す）と享（かう）年（ねん）七（しち）十（じゅう）七（しち）。或（ある）ハ（い）ふ。その病（びやう）危（あや）しとらん子（こ）舜（しん）馬（ま）順（じゆん）熙（し）と枕（まくら）を小（せう）  
招（ま）きて宣（のたま）ひたり。父（ちち）八（はち）節（せつ）殿（でん）の蓋（がい）世（せい）の勇（ゆう）将（しやう）は忠（ちゆう）義（ぎ）又（また）篤（とく）といふも。  
生涯（せうが）孤（こ）島（しま）に沈（しん）淪（りん）して志（こころ）を消（き）えりた。れ不（ふ）肖（せう）ありといふも。その子（こ）  
ら。身（み）に南（なん）嶋（しま）に病（びやう）死（し）ねども。心（こころ）に故（こ）國（くに）の日本（にっぽん）へかへり。心（こころ）よくつが魂（たま）を。  
かゝるに度（あ）兄（あ）足（あ）利（あ）義（あ）包（あ） （知名朝雅義包或ハ義兼ハ作ス。これ） （足利義康の養子。第二編ヨリ）の家（い）お去（や）を。  
義包（ぎほう）の子（こ）孫（そん）あり。一つは名（な）の義（ぎ）敦（あつ）の尊（そん）の字（じ）と象（さ）るりの出（い）来（き）も舜（しん）天（てん）  
が後（のち）身（み）とあるべし。これ日（ひ）の本（ほん）の武（ぶ）将（しやう）とありて父（ちち）の志（こころ）を果（は）とべし。と云（い）言（げん）  
あまひらる。露（つゆ）むるもたぐいど義包（ぎほう）のおん子（こ）と義氏（ぎし）とす。りた義氏（ぎし）の  
おん子（こ）恭（こう）氏（し）恭（こう）氏（し）のおん子（こ）家（か）時（じ）家（か）時（じ）のおん子（こ）貞（てい）氏（し）貞（てい）氏（し）のおん子（こ）高（かう）氏（し）高（かう）氏（し）

春公記 卷之三 皇極經世一 下 卷之三

正應の軍功ありて後醍醐院おん諱の二字と賜ふ。尊氏とありたる  
 もひしより武威海内は敵う。京都將軍の祖と仰せらるひは彼舜天  
 の名のるの敷とある。武の尊の字と暗合せしこそ不思議な事。かくて  
 尊二世の王舜馬順熈王に在位十一年して宝治四年小卒と亨了年  
 六十四舜馬順熈のおん子。さるりち位を嗣め。諱は我本これ我本  
 王とと南嶋まどく無事して道の世こそめでたけれ以下係干日本之事  
 文治三年秋九月廿五日の朝中をたふ讀岐國白峯なる。崇徳院の山陵  
 をおられる丁ホ起出て落家おとくは拂りとせられ。誰とてあはれ身丈ハ七尺  
 のまうりして肚田ふ朽葉色の狩衣あたる。武士海廟の柱より身を倚りけ  
 腹を十文字にうき切くとり。此彼らち驚えつ。こゝろに。罵り強げ  
 とも。既子緯断されハ名字と問ふよまともは。ひり平家の残黨あは

あらんぞらんとしてやうて困の守護。告その鑑定おまうとせといへも  
 とえてあるりのおろりり。おち渡が従者お字を於地二郎と唱れせ  
 羊の齡ハ既お七十五及べる。流紫人ありけ。件の於地二郎死人の  
 面を。はくぐとらち觀る。怪しやとのりの。面教ハ流紫の山曹司お似  
 たりといへ。裏皆吐とらち笑ひて。為朝や。い。むじ狩野今茂光お  
 攻られて大嶋おて自殺。もひ首と京師へのおされ。こゝろりの今控  
 多うり。是ハ四國の武士お犯せる罪の脱とがとれたとあるりの。さうと  
 と平家の残黨あつるべし。とて緯の越を京都のち護北條時政お告  
 らせ。お彼死骸ある夜忽物とらせて。遂に往方おあつる。は。より人  
 るは怪し。お中をを累稱。これハ狐狸の所為なり。らまうとらうと  
 ゆうこそ鈍しけれ。と或はらうたて。或はらうと笑ひ。先の使のしやうとゆ

され亦人をまじりて京都へ注進ありけり。後おちりひ合をされハ  
為躬既福祿寿仙の擁護を受又瀨波院の引接よりて生るがく神  
なり神変不測の通力を以て日の本へ飛降りありとていごも。あは人間  
ふあり日の夙念を果さん為ふ白峯の山陵めて自殺を小し。聴て晩  
見して天地ふ徜徉一人の為ふ生を利し死を救んと誓ひありとて○  
不題為朝の二男朝稚ハ曩ふ足利我康ふ養れて我包と名告り我康  
の没後家督を嗣て後四位下治部大輔ふ補せられ左馬次又下野のち  
程て鎌倉殿に随後しあり。是より先文治四年の春我包二十五歳  
疲勞ありて足利の館に終居あり一日假寝の夢驚れ我包  
嫡男我氏ハ才を振れ大息吻て密結ありとて。これ今夢ふ実父ハ御殿  
木原山の隠宅を以清盛と祖尊んとて水行より浴入せられ折暴風ハ

弦を破れ琉球へ漂泊し。以後の凡十餘年の得失栄枯しを  
さく。近ごろ瀨波院の引接よりて生るがく神となりて日の本へ飛  
降り。白峯ふ示寂し。又身舜天丸ハ琉球國の王となりて源尊致  
と名告り舜天王と稱する。この餘忠臣烈女の陰徳每人賊民の隠隠  
えうふ隨て一事も忘れを不思議といふも疎るべし。これ足利の家ハ  
養れつるにむより為朝の子なることをめく匿せ。遂に世ふあられどと  
いごも鎌倉殿ハおそろし人なり。我包がかれ夢をいごり人といふ。必  
疑れん。おん今よりあ二年を待て國字とてあらる。密母を記  
てて後の曹たりん。のふ傳人よと宣ふ。我氏賢童なり。長物語を  
記憶し。その後より。閑室ふ入りて父の物より。隨ふ祖父為朝  
一代の事と記。めく宝庫秘て嫡子の外。披見をゆるされ。我氏

の時お至りて今川了俊のこころをえたりけりや難太子記も足利殿  
 と為朝の子孫なるはしを載り惜べし件の松録將軍義尚公の時  
 應仁の火も傍りて忽地鳥有となりてあまのされば足利義包朝臣の夢  
 てふりのも頼れて事の虚実をあらん為ふ猛ふ鎌倉へ出仕し遠景  
 信房亦も會して琉球のふりとも向ふ人の信房亦答て今琉球の國王を  
 舜天と号しといふあまのさすも義包も正夢なりと感懐しおひこ  
 万里あかしまあはれ今茲文治四年の秋八月後二位頼朝卿へ藤原  
 泰衡亦討んとてさうら數千の士卒をたて奥州へ進發さす  
 うば義包もあはれの催促も後ひも入てふれども目さしに働きたる  
 鎌倉殿も思れん致と遠慮してさうら軍をさすもさうらけり  
 為朝さうら神通をあらして敵を調伏しむられば泰衡頻に敗軍

志で三十日もの柱ほごひかひなく滅亡せりこの神恩を報んとて  
 頼朝卿の凱陣の後八丈の末嶋なる為朝の社は彼造を假縁由と京都へ  
 執奏ありしうばさうら為朝も正一位を贈りたまり後高倉院の宮の  
 お八筆して正一位八郎明神の額をほ下されしうば頼朝又衣冠束帯  
 の神像を造りて勅額さうらに末嶋の社へ移りしけりこの便宜  
 をほし八丈ふをいしはしうば長女が腹なれ為朝の二子太郎丸為朝  
 二郎丸法師の鎌倉へ赴て為朝の子なるはしを父えあげあまのふ  
 尾張より熱田の大宮司使者を進りて嶋君のふりたまうらさうら  
 頼朝さうらら太郎丸あは伊豆の大崎を管領さうらよの御教書を  
 る下し二郎丸法師あは八丈嶋をあらり弥陀寺の住持補して八郎  
 明神の別當兼帯せしめ嶋君あは莊園二箇所を属られ化粧料

あそ賜てがれ。されば太郎九郎大嶋太郎為家と名生りて後ある大嶋  
以下の五嶋を管領し廿八騎の子孫を扶持してその家まをく繁昌  
せり。又八丈嶋がれ二郎法師の四男五郎が老臣として嶋の政より繁昌  
行す。又八嶋人ホ二郎法師を敬して弥陀寺の宮と稱し四男五郎  
を大夫と稱せり。宮と大夫の子孫相續して六世敏昌ありける。又嶋君  
と熱田大宮司季範の息男大推丸義實の妻となりて義信。我直と  
いふ男子ありて産てその家永く栄えり。はじめ朝九郎小治原と  
いふと白縫を取りあり。あつりて筑後國山門郡某の郷に東莊司  
西莊司といふ郷士のあつて豊多き。これ女見ひりて。りて朝志をし  
この東西の女もかよひまひりて。いりては。りて。後二件乃  
は。りて。月よひとし。男子を産ふけり。為朝。これをありたり。後と。

外祖の莊司源氏の。曹司の落胤なればとて。等困す。と養育を  
ふ保元の兵乱起り。為朝と伊豆の大嶋へ流され。いりて。崇をわきて  
世ある。つり。匿り。り。小文治四至。至て彼異母兄。弟。朝の子ども  
ま。世。知れ。と。傳。て。謙倉へ。止。一條の因縁を。覚え。あ。けて。勤。え。り。り  
せ。く。謙倉殿。食。儀。あり。て。彼。西。東。の。子。ども。に。一。所。懸。命。の。莊。園。を。宛  
行。し。り。り。その。東。あ。て。生。れ。り。東。腹。の。源。太。と。唱。へ。西。あ。て。生。れ。り。り。り。を  
西。腹。の。源。次。と。唱。へ。り。は。子。孫。遂。小。西。腹。東。腹。を。氏。と。せ。り。後。又。腹。を。原  
小。書。更。し。と。も。今。る。月。彼。國。母。東。原。西。原。と。名。告。る。人。あり。り。り。為。朝。の  
子。孫。なり。り。今。東。原。衰。へ。て。西。原。氏。の。と。多。り。り。あり。り。足。利。義。包  
の。こ。り。所。の。れ。が。為。朝。の。子。なる。は。し。を。披。垂。さ。り。り。り。と。い。ふ。も。北。條  
時。政。の。祿。者。と。なり。り。り。り。り。お。の。づ。ら。世。の。人。の。お。り。り。り。り。り。り。重。く。



官位もたかく進... 義包ぬ。身丈七尺あり。
膂力ハ三十人ハ敵... 生誕自己の勇力を見せしま
つて風狂して... 頼朝も底意お忌めど... 握原が終には入
脱は... 一生無事を送りぬ。これの進退をありぬ。義包を
勇力の世ハ勝... 又遠謀の人といふ... 比
都鄙良賤の夜活... 宗徳院の神... 通符ハ福ハ悪
小禍... 頼朝卿ハ元来宗徳帝の御...
敬信... 神領を寄附... 京都へも委用ありて
室祚長久の... 且世の為ハ新院の... 宗...
させ... 新院も為朝ぬ... 配所...
人の敬不随... 神徳年々... 灼然なり。かゞ... 義包の子孫ハ郎

明神の擁護... 危難を脱... 建保元年の
和田合戦... 義包の嫡男義氏ハ朝夷三郎義秀... 鐘の草摺...
や... 既... 不... 神の祐ありて... 亦文和
元年... 武義野の合戦... 尊氏御敗軍... 新田義宗朝臣... 追...
既... 神の祐あり... 危難を脱...
多... 外ハ勝利を獲て... 我宗義治を越後へ奔らし... 餘度...
の危難を脱れて... 海内ハ掌握... 全く八郎明神の
衛護... 人... 惜... 尊氏兄弟... 行状... 為朝...
あ... 多... 激者... 眉... 算...
至... 八郎の神... 衛護... 十三代の間世の
静... 年... 稀... 祖... 徳... 憑... 身

の高運も誇りや足らば一世の富も身後も取多し一朝の利も  
後栄も損あり孔子春秋を化す乱臣賊子おそれ董狐筆を終る  
三晋おのく集りや書記とてども夢物かたりふ似てこそと  
りとも好憎を捨て理我をくろ情慾を首れて公論を取らば  
八郎は是富貴の人為朝の徳呼至まこれ哉

椿説弓張月残編卷之五 大尾

為朝神社并南嶋地名辨畧

本朝怪談故事 印 卷の三小異人叢話を引て云阿波の徳嶋お名名の小社あり  
けその隣家の船 彼理亮の屋舗のり慶長壬寅の夏この社の塀の尾  
落を待理がむあおのしを奴隷をこれをち捨りければ俄頃炊婢瀧  
涪つゝこれに是鎮西八郎為朝の敬神の公認くともこの社の尾は捨れ  
ともある一家悉罰へを落れぬ彼理これをせりち擧げぬ社の社なるは  
武士の崇敬ゆき神よりていしませ況て神社の尾をち捨ること勿体なし  
あつれどもあつれはふるれば悔てかくは赦しぬ社を造営せしと勧解  
あければ神の怒とけけけん炊婢の覚りかくて新の社を造立して叮嚀も  
敬礼あつりしう神又婢女を託して云神社を造立せりて満足せり今  
より十年をまへ主人は奇特の福をよみと示しあひが果て甲寅の

役よ父子大功を顯しその家まこと繁昌せり。これよりて婦らび為朝の社地を清し更む社を終造せしむ。さて吉るの多りなり。

○撰陽群談卷の十一神社の部第六十張八幡社ハ河邊郡伊丹の南あり。鎮西八部為朝を祭神とて号て為朝八幡といふ。縁起をいまわん。是も阿洲の稻氏が建立せし也。尋ねば。

○増補越後名寄卷の三神社の部小川羽郡八幡村ハ八幡の社あり。文治のじゆ源義経朝臣潜ひて奥州へ下向のとき且くこの処へ逼りて義経勸清ありて鎧刀等を寄附とてこの神の賞罰灼然たり。近世神木と伐られ

ものを罰多ることありといふ或は義経その身の汚命を歎されのあまり叔父為朝のゆを乞ひおしてその神を八幡宮とて祭り。祈願をまじしといふ或は同國弥彦の驛ハ八幡宮の小社あり。これを社をなるといふ。この

両説ハ土俗の異傳に傳る所是不とて按ずる同書同卷伊夜比古神社の條下よ云當社の神室ハ鎮西八部為朝の箭の根あり。墓股あり。股の用く七寸余片羽の長ハ八寸なり。篋入の長ハ七寸。コニ際ハ猪日透無銘云云

これを流り傳る也。為朝の箭の根といふ所の所くふの信に於て。○永正年間瀧澤孫三郎源兼清也。感得のこめてて居住の地ハ河國設樂郡瀧澤の郷ハ鎮西八部の神を勧請とて号て為朝八幡といふ。今その蹟洋る也

又一説ハ下總國生實の大教寺ハ瀧澤山と号す。浄土。この寺の辺ハ為朝の箭の根石といふ所のあり。大石あり。石の面自然と矢の根の形あり。往昔その邊の壤崩て石ハ反覆して過半土中に滅せ故に今ハ矢の根とていふ所のあり

説も里老の口碑ハ傳るあり。いま書おるをよむとていふの如く藁と存也。○鎌倉の星月夜の井ハむじ為朝伊豆の大嶋の配所あり。時一日清く向く

箭を煮多し。その箭形は井の底に墮るといふ。是浮波の言。其  
るる。鎌倉志卷の六星月夜井の條下に里俗の説を収る。云昔此井の中  
書り星の影を以て故に名く此邊の奴婢は井を汲すとて畏て菜刀を井の  
中人落たり。雨より菜星の影見え云云此のを流りけり。今源倉ふ  
て御導せんとし。田翁牧童はよく為朝の矢の根のふとのまあり。

○和漢三才圖會卷の六十七伊豆國の條下ふ云為朝社の大嶋あり  
祭神鎮西八郎為朝云云大嶋小嶋為朝の社あること。詳るよは八丈の  
小嶋を大嶋小嶋を欽同書ふ又云一説小嶋為朝大嶋を遣れ出で琉球國に  
至り自主とされ彼嶋も亦天をわけて舜天太神官と名づく云云按  
るる舜天ハ為朝の子なり。志るれ父の為朝の靈成すなり。舜天  
太神官とるるの理ふおして稱すと。傳人悞るるなり。一書引中山

世譜云南宋乾道元年乙酉鎮西為朝公。隨流至國  
生一子而返其子名尊敦後為浦添按司。中畧國人  
推戴尊敦為君。是舜天王也。又云舜天王。姓源。号尊  
敦。父鎮西八郎為朝公。母大里按司妹。云云。  
かの中山世譜を國人紫金大夫蔡温が撰述せられたるなりといふ。  
又南嶋志。舜天王譜云。舜天。故將軍源朝臣義家孫。  
廷尉為義子為朝。配伊豆洲及平氏。擅權朝政。日衰。  
常憤激。欲復祖業。因浮海上。略諸島之地。遂至南嶋。  
乃徇其地。而還居。未幾。官兵襲攻之。竟自殺。有遺孤。  
在南中。母大里。按司妹。育于母氏。幼而峻嶷。乃有父  
之風。及長。衆推為浦添按司。方是時。諸島兵起。戰鬥。

長谷川元長月合書

不息。按司年二十二。乃率其衆一匡清乱。舉國尊稱。以為王。舜天王是已。是歲文治三年也。云云。又傳信錄云。舜天日本入皇後裔。大里按司朝公男子也。云云。世譜及南嶋志。舜天之母。大里按司の妹。傳信錄云。為朝。大里按司。その説。銚看と。舜天の母。大里按司の妹。傳信錄云。為朝。大里按司。又琉球事略。舜天。國入。推されて。浦添の按司。年十五。と。傳信錄。是。世譜圖。和漢三才圖會。所云。舜天。神宮の説。肥後國。北郡濱村。矢八宮。稱。小社。祭神。鎮西。為朝。又。同郡津那木。の瀨村。為朝の充倉。兩社の縁起。の書。第二編卷の一備考の中。に収。又。斐國巨摩郡上宮地村。為朝の神社。縁起。の書。第二編卷の六。九五張。載。又。伊豆國八丈の鹿島小嶋。祭神。所。の。八郎。明神の縁起。の書。第二編卷の一備考の條下。収。神影一張。同卷の。端。其。字。又。小嶋の畧圖。の編の首卷。載。又。尾張の城南。太渡。或。村。の。為朝墳。及。闇森。の。為朝八幡の縁起。の書。第二編備考。の條下。出。此。の。六社の辨。既。載。前冊。詳。今。類。の。略記。為朝神社。九十一社。の。餘。往古。南中。諸島。の名。定。天朝の史書。掖。又。多。隨書。始。流。求。と。書。宋。史。因。元。史。瑞。求。明。の。洪。武。中。琉球。又。和書。文。治。建。久。の。後。鬼。界。或。鬼。嶋。と。流。求。と。唱。子。家。物。語。源。平。盛。衰。記。法。勝。寺。の。執。行。俊。寛。鬼。界。嶋。へ。流。近。世。好。の。の。長。崎。八。九。里。洋。中。今。鬼。界。

二編卷の六九五張載より又伊豆國八丈の鹿島小嶋祭神所の八郎明神の縁起とこの書の第二編卷の一備考の條下収神影一張同卷の端其字又小嶋の畧圖への編の首卷に載り又尾張の城南太渡或村の為朝墳及闇森の為朝八幡の縁起この書の第二編備考の條下出此の六社の辨既載前冊詳今類の略記為朝神社九十一社の餘往古南中諸島の名定天朝の史書掖又多隨書始流求と書宋史因元史瑞求明の洪武中琉球又和書文治建久の後鬼界或鬼嶋と流求と唱を子家物語源平盛衰記法勝寺の執行俊寛鬼界嶋へ流近世好のの長崎八九里洋中今鬼界

と唱ふ。一小嶋をいじり俊寛の流されたる處にて碑を建てりてとて。さうして由  
東鑑小頼朝御遠景信房して奇賀井嶋と討てり。後を按るにこの嶋の  
俊寛の流されたる孤嶋ありて全く今の琉球のくわんげん也又中山傳信録の  
載する所の琉球三十六嶋の圖説を併るに奇界と唱る一小嶋あり。大嶋  
の東北のあり。琉球最遠の嶋と云。硫磺山へも究て遠し。これも俊寛の流され  
たる所あり。あつたれば如何をりてあると云はれ。奇界の中葉南島の總名なり。  
後小渚嶋の名定りて僅一小島に舊名れのくわんげん大和國の倭の里あり。  
三河の碧石海郡に碧石海の郷和名抄あり。か如し。この餘河内河内郡あり。和泉の  
和泉郡あり。駿河は駿河郡あり。か勝て討てり。今も干して俊寛  
の配所あり。これの嶋とも定めがはし。便東鑑に記せりとるを澄と云へり。

東鑑卷之五。文治四年二月九日。條云。天野藤内遠

景去朔。昨日自鎮西。泰著去年窮冬。令郎從等渡  
貴賀井嶋。窺形勢。訖令追神之。徐定不可有子細。但  
雖相催鎮西御家人等。不一揆之間。頗以無勢。重可  
被下御教書。云云。所衆信房自身可渡海之。昔殊結  
構。然而遠景加制止之間。遣親類等。尤為精兵之由  
載之。此事兼日風聞于京都。仍自執柄家。有被諷諫  
申之。昔降伏三韓者。上古事也。至末代者。非人力之  
所覃。彼嶋境者。日域太難測。其故實為將軍士定有  
煩無益。欽宜令停止。給之由。云云。就之。暫可令猶豫  
之。昔被仰遣遠景。又同年三月五日。條云。所衆信房  
去月之比。自鎮西進書。狀貴賀井嶋渡事。徐々言上。

去年依窺得件形勢海路次第。令畫圖之就覽是為  
 難儀之由。諸人依奉諷詞頗雖思食止御覽繪圖之  
 後強不可疲人力牧之由。更思食立云云。此事信房  
 殊竭大功之間。今日所被加賞也。又同年五月十七  
 日。徐云遠景已下。御使等渡貴賀井嶋。遂合戰。彼所  
 已歸降之由。所言上也。而宇都宮所裏信房。殊施勲  
 功云云。上貴賀井嶋假字之不通。奇界又鬼界。又鬼界之傳。鬼界之傳  
 づて鬼が嶋ともいふ。鬼が嶋と唱るも又本は所あり。大明一統志  
 卷八十九琉球國風俗の疏。寰宇記にて云。事山海之神。以酒肴  
 鬪戰殺人。即以所殺人祭其神王。所居壁中多聚鬪  
 鬪以爲佳云云。これハ琉球上古の風俗也。又その俗鬼が信ト神と畏れ

最毒館を畏るるといふ説あり。保元物語の作者のあれりのるを傳へて  
 為朝崎波の役を書きしやと。保元物語の作者のあれりのるを傳へて  
 玉の居所壁の中より鬪鬪を襲めて佳と云ふ。如ハ世俗の所云  
 鬼魅の形状相似り。保元物語の作者のあれりのるを傳へて  
 鬼が嶋と云ふ。然れば汝等の鬼の子孫なり。さへいさへおの宝あり。取  
 ちせよ。んんと宣へば。若正しく鬼神あり。時ハ隱蓑隱笠。浮屠復劍。さといふ  
 宝ありけり。その比ハ他國へ渡りて日に食ふに。誓をも取り。今ハ果報盡  
 て宝も失せ人となり。他國へ行とも叶ひぬ。いさへおの宝あり。取  
 ちせよ。んんと宣へば。若正しく鬼神あり。時ハ隱蓑隱笠。浮屠復劍。さといふ  
 大元草多く生す。れハ草嶋とぞ名附され。この嶋俱く七嶋知行と。是ハ八丈  
 島の。れ嶋と云。以上鬼が嶋を更て草嶋と。八丈の口。記を。あはれとあり。とを  
 こふ。い。鬼が嶋ハ今の昔。う。嶋をい。あはれとあり。ま。これ。も。を。人。の。形。勢。ハ。

冥冥に記す所謂琉球上古の語は異なりんがれり。この比鬼界といひ  
鬼が海と唱へるの南嶋の物名をれと就中琉球を存てり。蓋奇界の奇  
怪なり。この國往古妖神現して奇怪の事多かり。故にこの名ありといふ。

○國史に琉球を存て披致とあるは正し。はは大隅の夜向嶋あり。海路とありて  
往來をれり。按とるは。大隅國取謨郡小今るは屋久嶋と唱る也。あり蓋  
古名の存せる也。又琉球の地名は九州の地名を擬しりともあり。少くは  
肥後と傳敷と唱る也。あり。水俣へ四里半。八代へも遠く。琉球山南省。又  
佐敷と唱る間切あり。肥後と濱村といふ漁村あり。琉球の勝連も。又濱村

といふ村里あり。この餘の郷名大々この方々似たり。  
○袋中の説は南中畏るべしの甚し。あり。の毒蛇。昔その王大成。成当。蛇害の  
の。天朝神代は山田の大蛇あり。この後日本武尊近江

勝山に毒蛇を飲し。ひしが。蛇毒の爲に毒死したまひ死か。天朝の  
古。毒蛇を畏るること南中に異なり。今るは畏るべき物也。蛇とて鬼といひ  
蛇といふ彼我その俗亦相似たり。

○うほまの嶋に琉球の語あり。其臺灣をいふといふ説あり。まうれども  
下。初。琉球の語あり。とあり。其。隨人。致。な。ほ。尋。ね。ば。也。

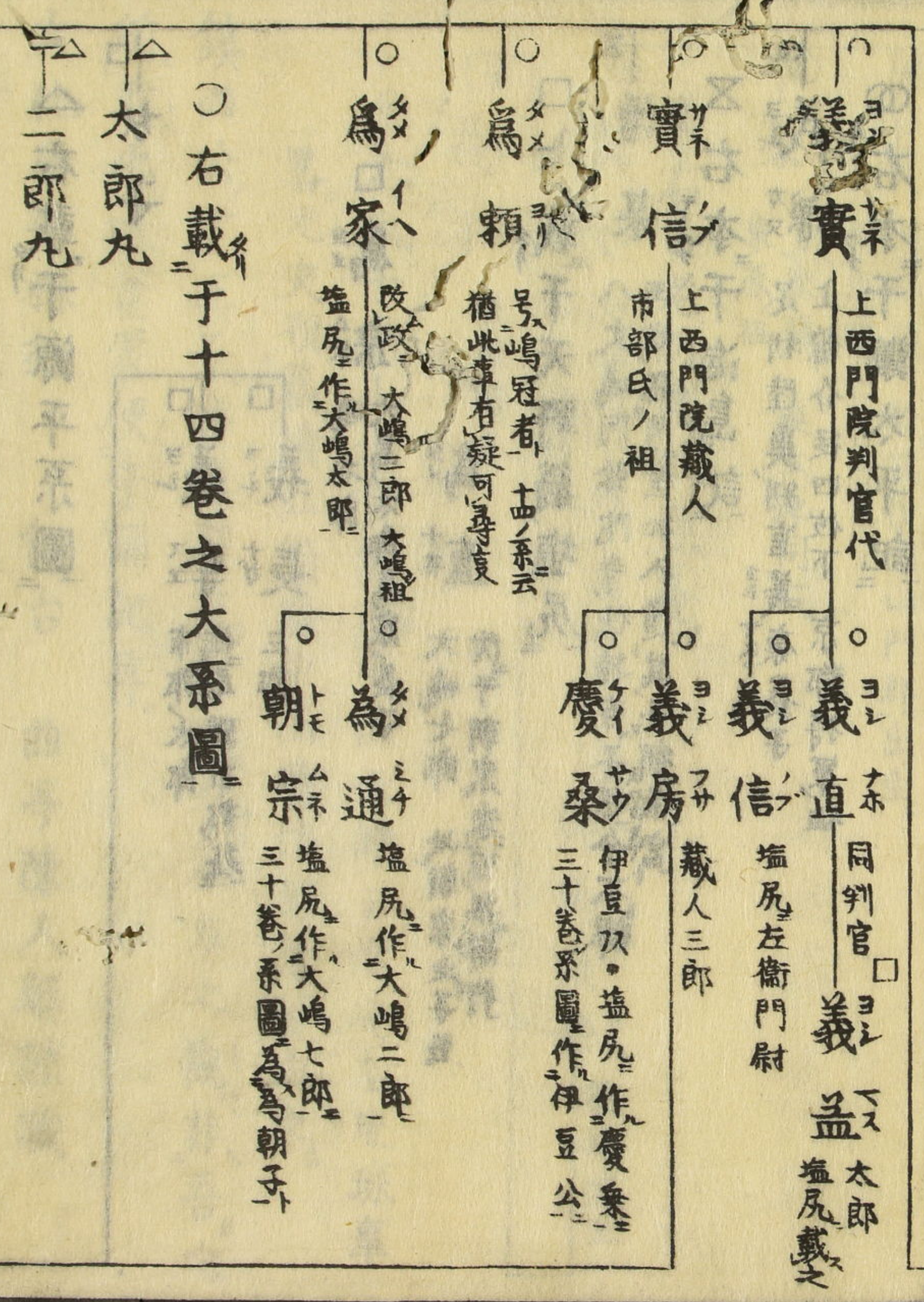
○近属八丈嶋に。朝の神像東都あり。お。ま。り。あり。ひ。り。その。歸。路。  
相。摸。灘。よ。て。破。船。あり。り。り。辛。く。て。喪。皆。恙。は。し。り。ども。神。像。既。に。洋。中。に  
没。し。ひ。れ。ば。り。ん。この。か。さ。ひ。が。り。り。し。ふ。勿。然。として。あり。り。り。海。叢

の上。ふ。ま。り。入。り。り。の。且。致。ひ。且。ま。り。や。が。て。小。舟。を。は。して。り。り。ぬ。り。り。  
と。て。この。神。あり。り。り。又。り。り。丙。寅。の。ま。り。の。書。の。第。二。編。刺。成。り。  
發。取。と。て。卷。帙。駭。海。松。よ。め。り。り。浪。花。の。書。賈。へ。せ。り。り。り。其。松。伊。豆。浦



むで風波中破れんとて辛して大崎入漕す。彼荒磯ふ西三日歌り。浪を  
 順風を仍て恙なく浪花へ忘るる。この信ふ不思議の因縁。かや予嘗  
 為朝の人とあり歎唱とよりて今その演義の一書以大成し。毎編曲よ升さ。実  
 を致索せどつとくさ。あられも浅陋寡聞僅に十が二三を獲り君とん  
 いうたれとや契りけん昔の世々もひかれバ亦不可思議の因果なるか。好  
 ○為朝の譜一張を掲げて童蒙の爲す足る。杜撰のわづら。圖號と認て出入を  
 されべし。系圖△ハ源平□ハ塩屋△ハ海島○ハ難大●ハ古老○ハ中山世  
 人皇五十六代清和天皇七世後裔。正四位下。鎮守府將軍。  
 陸奥守。源朝臣義家嫡孫。六條判官為義八男。  
 為朝 住鎮西 鎮西八郎一  
 大精兵 第一健弓大矢猛將也  
 元乱。朝敵分散之後。不知行方。隱居江州山寺。  
 兼元九三。為佐渡兵衛尉。重定被擄。仍同月八日進京。  
 被渡上下陣了。其後仰義朝。被披左右肩。被配伊豆大嶋。  
 後鎮領近嶋七八ヶ所。後入鬼嶋云云。下畧

為朝略傳 八十四卷  
 系圖ヲ抄  
 義家子 太郎義益  
 八塩尻ニ  
 本シク他  
 本ニナシ  
 塩尻ニ又  
 為宗ト云  
 モノヲ載  
 ス為道  
 朝宗ノ  
 兄ナリ  
 太郎丸  
 二郎丸  
 他本ニナシ  
 為家  
 為家  
 為家



卷之五  
 二二二

為宗當  
列為家  
下為通  
上為道  
堂既朝  
宗末

南嶋志云  
玉帝度  
舞天裔  
ナラント  
記信信  
録ニハ王  
尚圓ヲ  
義本後  
ナラント  
イ介方  
今得考  
ハカラス

△右載于源平系圖

女子

義季 市部太郎  
住尾張市部  
義長 三郎

鳥宗 大島太郎為家長子

鳥直 大嶋七郎 此朝宗之子也  
附于朝宗未而無解行

載于天野翁塩尻

僧某 八丈嶋阿弥陀寺住持有子孫今不詳  
五世孫号雲加入道其子稱繼宮

△右本干海島記

義兼 足利陸奥判官義康養子  
上總介後四位下 京都將軍祖

○右本干難太平記

某 西原祖 於筑後国山門郡出生

某 号東腹 誕生地同右  
東原祖

●右古老所傳姑存藁

琉球國中與主舜天王 舜馬順熱 琉球國王

義本 琉球國王

○右出于中山世賢圖及中山世譜云南嶋志琉球事  
畧元史類篇續弘簡錄中山傳信錄等皆由之

鎮西公十三子涉獵群書以譜之大方之觀非吾之所敢也唯童蒙便于誦記耳

文化庚午林鍾 飯台 曲亭陳人解謹識

東都 葛飾北齋畫圖

○此篇ハ曲亭馬琴翁著作中ノ一大奇書ナリ  
一帙各六冊五篇凡三十卷  
文化乙丑ノ冬稿ヲ幾シ同辛未ノ春全璧ト成レリ

江戸本所 堅川松坂町

書舖

平林莊五郎壽梓

和漢 西洋 書籍賣捌處

大阪心齋橋博愛町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

